消防士長の俺、仮眠室で扱いてるのを部下に撮られ、当直のたびに防火衣を着たままケツ穴を突かれて中に出される

2026 R18
•
10
•
20

目次

第1話　仮眠室の動画

第2話　乾燥機の音

第1話　仮眠室の動画

建物火災から戻った夜、俺は仮眠室の自分の仕切りで、ちんぽを握っていた。

握るつもりはなかった。

火は夜半に落ち、小隊は最後に署へ戻った。

入口で防火衣の煤を払い、首と腕だけシャワーで流した。

それで体は落ち着くはずだった。

仮眠用のTシャツと短パンで寝台に横になると、短パンの前が布を持ち上げていた。

隣の仕切りから、低い寝息が聞こえる。

カーテン一枚向こうで、誰かが寝ている。

「……クソが」

口の中で吐いて、俺は仰向けのまま腹に掌を置いた。

火の前で号令をかけた興奮が、まだ抜けない。

足場を指し、隊員を下がらせ、熱い風を首で受けた。

それが全部、股に下りてきていた。

寝返りを打つと、寝台が俺の重さでぎしりと鳴る。

すぐに仰向けへ戻った。
短パンのゴムに指を入れる。
ちんぽはもう腹に張りついていて、亀頭の先がぬるりと濡れていた。
――当直の夜に、隊の先頭に立つ男が何をしてる。
分かっていて、右手は竿を握った。
握った途端、腰が浮いた。
俺は枕の角を奥歯で噛んだ。
「ぐ、ぅ……」
声は布に吸わせる。

手首だけを小さく動かす。
扱く幅を大きくすれば、寝台が鳴る。
左手はシーツを掴み、指の関節が白くなった。
にちゃ、にちゃ、と我慢汁の音が掌の中で立つ。
自分の耳にだけ近い音だ。
隣の寝息は変わらない。
亀頭のくびれに指の輪を引っかけると、背中が反った。
寝台の枠がみし、と鳴りかけて、俺は腰を落とした。
掌の中で、竿が太い血の筋を浮かせている。
握り直すたびに、指の股に我慢汁が溜まっていく。

汗が胸の谷に溜まって、Tシャツに染みていく。
足の指がシーツを掻いた。
膝を立てかけて、カーテンに触れそうになり、また伸ばす。
金玉が腿のあいだでせり上がってくる。
「フーッ、フーッ……」
鼻で吸って、鼻で吐く。
口を開けたら、声が出る。
カーテンの裾が、一度だけ擦れる音を立てた。
換気の風だと思った。
振り向けば息が漏れる。

俺は枕に顔を埋めたまま、手首を動かし続けた。
親指で亀頭を潰すように擦ったとき、腹の奥が縮んだ。
「ン〝ッ……！」
ザーメンが腹に飛び、掌の中にもどろりと溢れた。
腰が跳ねて、寝台が小さく鳴った。
太腿の震えが、少し遅れて来た。
枕元のタオルで腹と手を拭き、短パンを戻した。
カーテンの裾がなぜ鳴ったのか、俺は確かめなかった。
「士長、了解です！」

二日後の当直、昼の訓練で、楯岡航希は列の端からいつもの声を返してきた。

ホースを担いで走るのも、返事の大きさも、小隊でいちばんだ。

俺はうなずいて、次の号令をかけた。

「一番、延長！　筒先、前へ出ろ！」

機関員が車の脇から手を挙げた。

「士長、水圧上げます」

「上げろ。放水始め！」

放水が終わってホースを巻いていると、航希が筒先を抱えて寄ってきた。

「士長、こないだの夜、よく寝れました？　出場明けって、俺、目が冴えちゃって」
「寝た」
「さすが。俺、仮眠室だと、夜中の音とかすごい気になっちゃうんですよね。カーテン一枚だから」
俺はホースの継ぎ目から目を上げなかった。
「無駄口叩いてねえで、筒先の水切っとけ」
「了解です！　あ、士長、耳の後ろ、まだ煤ついてますよ」
「後で拭く。てめえはホースの泥、落としとけ」
航希は笑って、筒先を車へ積みにいった。

俺は巻きかけのホースを、もう一度足で踏んで締め直した。
航希の仕切りは、通路を挟んだ俺の向かいだった。
消灯のあと、仕切りのカーテンの外から声がした。
「士長、起きてます？　装備室、ちょっと見てほしいとこがあって」
「明日にしろ」
「今がいいんです。士長じゃないと分かんないとこなんで」
破れた手袋か、緩んだ金具だろうと思った。
俺はTシャツと短パンの上に活動服の上着を羽織り、スリッパで廊下へ出た。
向かいの仕切りから、同僚の寝言が漏れた。

「……ん、ホース、こっち……」

装備室の扉を閉めると、蛍光灯の白だけが残った。

防火衣がロッカーごとに吊られ、乾いたゴムと煤の匂いがする。

航希はスマホを片手に、ロッカーの前に立っていた。

「鍵、閉めといてください。点検中ってことで」

「どこだ。金具か」

「これです」

画面がこちらを向いた。

「音、出しますね。小さめにしときます」

薄暗い仕切りの中で、男が枕に顔を半分埋めている。

短パンの中で、右手が動いている。
首の日焼けの境まで映っていた。
俺だった。
「よく撮れてるでしょ。カーテン、指一本ぶん開いてたんですよ」
航希は喉の奥で笑った。
「この部屋、夜は誰も来ないですよ。音、もうちょっと上げます？」
画面の中で、俺の腰が浮く。
布越しの「ぐ、ぅ」が、小さい音で再生された。
「……てめえ、いつ撮った」

「出場の夜ですよ。士長、帰ってきてシャワー短かったですよね。首と腕だけ」

「消せ」

航希はスマホを持つ手を、少しも下げなかった。

「ここ、見てください。枕の角、噛んでる。隊の手本が」

画面の中の俺は、眉を寄せて枕の角に歯を立てていた。

「この顔、車庫の連中が見たらどうなるかな。小隊長が枕しゃぶってる」

「寄越せ」

手を伸ばすと、航希は一歩下がって、画面を自分の胸に伏せた。

声より先に、背中に汗が出た。

「署で知られたら、士長の昇任も信用も終わりですね」

航希は笑ったままの顔で、スマホを胸に当て直した。

「……何が欲しい。言え。当直の交代か。訓練の配置か。筒先、持ちてえんだろ」

航希はきょとんとした顔をして、それから吹き出した。

「士長、俺のこと、そういうので動く奴だと思ってたんですか。ひどいなあ」

「なら何だ」

「筒先なんか持ったら、前しか見えないじゃないですか。俺、ホースの後ろ握ってるほうがいいんです。後ろからずっと、士長の背中見てられるんで。この人、出すときどんな顔するんだろって」

航希はスマホの角を、自分の顎に当てた。

「画面のは、枕で半分隠れてるんです。だから、ちゃんと見たいんです。ここで」

「……頭おかしいのか、てめえ」

航希は答えの代わりに、にこっと笑った。

「上着、脱いでください。Tシャツも、短パンも」

「ふざけんな」

航希はスマホを顔の横で、軽く振ってみせた。
画面は伏せたままだ。
「士長、号令かけるときは迷わないのに。脱ぐのはのろいんですね」
「……面ぁ、覚えたからな」
俺の指は、上着のボタンにかかっていた。
ボタンを外し、上着を棚に畳む。
Tシャツを頭から抜くと、蛍光灯の光が胸に当たった。
短パンに指をかけたところで、手が動かなくなった。
「下着もですよ。士長、廊下の電気、まだ点いてますからね。誰か通るかも」

俺は短パンと下着をまとめて足首まで落とした。
スリッパから足を抜く。
コンクリートが、足の裏に冷たかった。
航希の目が、足の甲から膝、腿へ、ゆっくり上がってくる。
最後に股のあいだで、目が笑った。
ちんぽは、半分勃ったまま重そうに垂れていた。
「へえ」
航希が鼻で笑った。
「でかいですね。柔道でしたっけ。体と一緒で、ちんぽまで重たそう」

俺は高校まで柔道をやっていた。
胸と肩が厚く、太腿は活動服のズボンでも外側が張る。
首から上だけが日に焼けて、胸毛は薄い。
航希は俺より頭半分低く、肩幅も一回り狭い。
その一回り小さい男が、ロッカーにもたれて、裸の小隊長を上から下まで眺めていた。
「目ぇ下げんな。用があるなら顔見て言え」
「用なら、こっちにあるんで」
航希は目を上げずに、俺の股のあいだを顎で指した。
航希はロッカーから背を離して、俺の周りを半周した。

横から、腹と尻の厚みを眺めている。

「肩、まだ赤い。防火衣の跡ですか。昼の訓練の？　それとも、こないだの火事の？」

「防火衣の跡ぐらい、てめえの肩にもついてんだろうが」

「腹、割れてるのに上に一枚乗ってる。柔道の人の腹だ。ちんぽ、毛に埋まりかけてますよ。勃ってないと、案外かわいいんですね」

航希は俺の正面に戻って、腰をかがめ、垂れた金玉を覗きこんだ。

息がかかる距離だった。

それでも、指は来ない。

「金玉、片っぽ下がってる。左のほうが重いんですね」
「片っぽがどうした。てめえのは垂れる重さもねえのか」
「見せてもいいですけど、今日は士長の番なんで。防火衣のズボン、穿いてください。サスペンダーも。上はなしで」
自分のロッカーを開けた。
黒い防火衣のズボンに素足を通し、太腿まで引き上げる。
厚い生地が、腿の外で張った。
サスペンダーを裸の肩にかけると、出場のときと同じ重さが、肌に直接のしかかった。
金具が胸の下で鳴る。

前合わせは開いたままだ。
その隙間から、ちんぽと金玉がはみ出していた。
「うわ」
航希が声を出して笑った。
「出場の格好で、ちんぽだけ出てる。これで車庫に並んだら、隊員、どんな顔するかな」
「てめえ、外で一言でも漏らしてみろ」
「怖い顔。訓練のときとおんなじだ」
俺は前合わせを両手で寄せて、はみ出したものを隠そうとした。
「隠さないでください。せっかく出てるのに」

航希が笑いながら首をかしげると、俺の手は前合わせから離れて、腿の横へ落ちた。

航希が右手を上げて、親指と中指で輪を作った。

「俺の手だと、このくらいです」

長い指だった。

作った輪は、俺のちんぽの太さよりはっきり小さい。

「同じ輪、自分の指で作ってください。それで扱いて」

「……正気で言ってんのか」

「真面目ですよ。ほら、早く。夜が明けちゃう」

俺は右手の親指と中指で輪を作った。

航希が自分の輪と並べるように腕を伸ばし、「もうちょい小さく」と笑う。

指を締め直して、亀頭にあてがった。

入らない。

カリが輪の縁に引っかかり、皮だけが手前に寄って皺になる。

「ぐっ……」

押し込むと、輪がカリを無理やり越えた。

締めつけられた竿が、指の中でどくどく脈を打つ。

「あ、入った。でかいだけで、案外素直ですね」

「……っ、指が、食い込む」

航希は身を乗り出して、輪の手前で寄った皮を覗きこんだ。

「皮、寄ってますよ。自分でするときも、皮ごと動かすんですか。仮眠室のときは、先っぽばっかりいじってましたけど」

「動画の話を、すんな……」

航希は肩をすくめた。

「じゃあ今の話。今のほうが、ぬるぬるですね」

「てめえ、覚えてろよ。明日の訓練、ホース担いで塔を走らせてやる。吐くまでだ」

「塔なら毎日上り下りしてますよ。でも今は士長の番です。手、お留守」

輪を根元まで下ろし、また亀頭まで戻す。

カリを越えるたびに、輪の縁が裏筋をこそげて、腰がびくりと跳ねる。

皮が寄っては伸び、にちっ、にちっと湿った音が立つ。

「ゆっくり。指、緩んでますよ。爪が白くなるくらい締めて」

「締めたら、潰れる、だろうが……ッ」

「潰れないですよ、そんな立派なの。ほら、もっと」

締めると、亀頭の先から我慢汁が玉になって押し出された。

玉は膨らんで、輪の縁を伝って竿へ垂れた。

「ン〝……ッ」

「声。扉、薄いんですよ、ここ」

航希は扉のほうへ顎をしゃくって、また笑った。

俺は奥歯を噛み、鼻から息を吐いた。

輪の中で、ちんぽがさっきより一回り太くなっていく。

太くなるほど、指が食い込む。

食い込むほど、皮が引っ張られて亀頭が剥き出しになる。

「その前のとこ、ベリベリするやつ。ざらざらのほう、ありますよね」

面ファスナーのことだ。

出場のたびに、俺が自分の手で叩いて留める前合わせだ。

「裏筋、そこに当てて擦ってください。手は離して」
「てめえの頭ん中、煤でも詰まってんのか」
「勃ててる人に言われても。ほら、腹にくっつきそう」
航希はまた声を出して笑った。
俺は前合わせの片側をつまみ、ざらつくほうを外へ向けた。
腰を寄せて、裏筋をそこへ押しつける。
「っ、ぐ……！」
細かい鉤が、薄い皮に食い込んだ。
痛い。

なのに腰を引くと、引っかかった鉤が裏筋を逆向きに撫でていく。

ばり、と小さく剥がれる音がして、ちんぽが跳ね上がった。

「腰で。前後に。もっと気合い入れて」

腰を前へ出す。

ざらつきが裏筋からカリの下までを削る。

引く。

ばりばり、と音が装備室に響いた。

「い〝っ、つ……ッ、皮、持ってかれる……ッ」

「大丈夫、ちゃんとついてますよ。ほら、もう一回」

押しつける。
引く。
ばりっ。
「ぎ、ぃ……ッ！」
膝が内に折れかけて、俺は前合わせを握りしめた。
「痛いの好きなんですか、士長。痛いって顔して、腰、前に出てきてますよ」
「ぐ、ぎ……ッ」
我慢汁が糸を引いて、黒い生地に落ちた。
生地のそこだけ、色が濃くなる。

金玉は腿のあいだで縮み上がり、腰を出すたびに防火衣の生地に当たってぺちりと鳴った。

そのとき、廊下で靴音がした。

靴音は、装備室の前で途切れた。

コン、コン。

鉄の扉が鳴った。

「楯岡ー？　いるか」

当直の同僚の声だった。

俺は前合わせを掴んだまま、息を呑んだ。

航希は俺の顔を見て、口の端を上げた。

扉を指さし、声を落とす。

「扉に背中、つけてください。ズボンは膝まで。尻も扉にぺったり。手は動かしたまま」

首を横に振った。

航希はスマホを、俺の目の高さで揺らした。

俺は防火衣のズボンを膝まで下ろした。

サスペンダーが肩から外れて、金具が膝の横でぶらりと揺れる。

扉に背を預ける。

尻の肉が、冷えた鉄にべたりと張りついた。

「ひ、っ……」

冷たさが尻たぶから背骨を駆け上がる。

この鉄の板一枚向こうに、同僚が立っている。

航希は扉のすぐ横に立って、輪を作った指を俺の前に掲げた。

俺は右手の輪で、ちんぽを扱き始めた。

「点検でーす！　防火衣のほう、ちょっと見てまーす！」

「おー。悪い、赤ペン持ってねえ？　日報、書き直し食らってさ」

同僚の声が、鉄を伝って背中に響く。

肩甲骨に、その震えがじかに来た。

扱く手首を緩めると、航希が音を立てずに笑い、自分の輪をきゅっと締めてみせた。

俺は輪を締め直した。

にちっ、と音が立つ。

「ロッカーの上にありまーす！　あとで持っていきまーす！」

「あと、士長見なかったか。仕切りにいねえんだよ」

背中の板の向こうで、俺の話をしている。

ちんぽがびくんと跳ねて、我慢汁が床に落ちた。

航希は俺の股間を見て、それから扉を見た。

「士長ですか？　さっき、トイレのほう歩いてましたよー」

「そっか。無線の件、係長が朝イチで士長に聞くって。見かけたら言っといてくれ」

「了解でーす！」

扱くたびに、尻が扉を擦る。

汗で張りついた尻の肉が、鉄から剥がれるたびにぺたっと鳴る。

膝の横で揺れた金具が、扉の下の縁に当たりかけた。

俺は膝を内へ寄せて、金具を腿で挟んだ。

靴音が遠ざかっていく。

角を曲がって聞こえなくなるまで、航希の指の輪は俺の目の前から下りなかった。

だから俺の手も、一度も休めなかった。

「声、出さなかったですね。えらいえらい」

航希が、肩だけ揺らして笑った。
背中が、扉からずり落ちかける。
俺は扉に後頭部をつけたまま、口を開いた。
「あれは、違う。あの夜は出場明けで、血が上ってただけだ。火の中に二時間いたら、誰だってああなる。男なら一度はある。お前にだってあるだろ、当直明けに寝られねえ夜が。それだけのことだ。それだけのことで、お前は」
「それ、今の人に扉越しに聞かせてあげればよかったのに」
「っ、てめえ……」
航希は俺の股間を顎で指した。

「続き。ほら、ちんぽ乾いちゃう」

航希はロッカーの前まで下がった。

俺と航希のあいだに、腕を伸ばしても届かない距離ができる。

「扉から離れて、真ん中に立ってください。輪はもういいです。好きに握って」

俺は扉から背を剥がした。

尻に、鉄の冷たさの跡が残っている。

膝まで落ちたズボンに脚を取られて、装備室の真ん中までの数歩がよろけた。

「出すとき、俺のほう見ててください。画面のじゃ、半分しか見えなかったんで」

掌でちんぽを握った。

握っただけで、擦られた裏筋がひりついた。

扱く。

腰を前へ出すと、膝のズボンに引っ張られて体ごと揺れる。

揺れるたびに、金玉が重く跳ねて腿の内側を打った。

「金玉、ぺちぺち鳴ってる。腿、赤くなりますよ」

ずり落ちたサスペンダーの金具が、足首の横で床をこつこつ叩く。

「フーッ、フーッ、ぐ、ぅ……」

「膝にズボン溜めて、へこへこ。犬だって、もうちょっと上品に腰振りますよ」

「てめえの、靴に、ぶっかけてやろうか……ッ」

ひりつくほど、ちんぽは硬くなる。

にちゃにちゃと、さっきより大きい音が掌から出る。

止めたいのに、掌は亀頭を絞るところまで行ってしまう。

「ア、ア、焼け、る……ッ、裏、が……ッ」

航希はロッカーにもたれたまま、鼻で笑った。

「目、逸らした。ほら、こっち。それとも、さっきの人、呼び戻します？　士長いましたよーって」

「黙れ……ッ、ぐ、ぅ……」

「口は閉じてていいですよ。手のほうは休まないでくださいね」

顔を上げると、航希はロッカーにもたれて腕を組み、首をかしげて俺を見ていた。

画面越しではなく、自分の目で見ている。

昼の列で号令を聞くときと、同じ位置から見ている。

扱く手が、その視線に追い立てられて速くなった。

「あ、手が急いだ。見られてるほうが好きなんですか、士長」

「ふざけ……ッ、ア、ぐ、てめえの目が、うるせえんだよ……ッ」

亀頭が掌から押し出されるたびに、ひりつく裏筋が蛍光灯の下に晒される。

「フッ、ぐ、ぉ……ン　ッ、フーッ」

「すごい音。口閉じてても、鼻から全部出てますよ」

「鼻で、息、してんだよ……ッ」

航希はロッカーから背を離して、一歩だけ近づいた。

「その声で『放水始め』って言ってみてください。訓練のときみたいに」

「誰が、てめえの前で……ッ」

航希は楽しそうに笑って、それ以上は言わせなかった。
言わされなかったのが、かえって腹に残った。
汗が胸から腹へ流れ、サスペンダーの跡が残る肩で冷えた。
「汗、すごい。胸から垂れてる。訓練のあとより濡れてますね」
膝のズボンの中で、ふくらはぎが攣りそうに張る。
「ハッ、ア、脚、が、ぐ……ッ、ふくらはぎ、が……ッ」
「ズボン、膝で突っ張ってますね。脱がないのは士長の勝手ですけど」
掌の中で、ちんぽの根元がずくずくと脈を打ち始めた。

「根元、ぴくぴくしてる。もう出そうなんですか、士長。部下の前で」

「くそ、止まれ……ッ、止まれって、なんで、手が……ッ、ふざけんな、こんな格好で、ズボン膝に溜めて、部下に面ぁ見られて、なんで、硬くなってんだよ……ッ、くそ、くそ……ッ」

「ほんと、なんででしょうね」

航希が、声を出して笑った。

金玉が根元に張りついた。

「金玉、上がった。出るとこ、目ぇ逸らさないでくださいね」

航希は組んでいた腕をほどいて、笑ったまま俺の顔を覗きこんだ。

――部下に、全部見られてる。

「ア、ア、出、ちんぽ、が、ぐ……ッ」

「ン゛ッ、ぐ、お……ッ！」

ザーメンがびゅっと飛んで、航希の靴の少し手前の床を打った。

「飛んだ。俺の靴、あと一歩でしたよ」

続けて噴いた分が防火衣の前合わせにかかり、ざらつく面ファスナーに白く絡む。

膝が落ちかけて、俺は足の指でコンクリートを掴んだ。

「お　〃、ア、まだ、来る、ア、ア……ッ」

掌の中で、ちんぽがまだびくびく跳ねている。

「ハ、ア、手ん中で、跳ね、て……ッ」

亀頭の先から、残りがとろりと垂れた。

「ハッ、ハッ……ア、ぐ……ッ」

俺は膝を掴んで、床の白い跡を見下ろした。

「……クソ、が……てめえの、せいだ……」

「うわ。床、汚さないでくださいよ」

航希が腹を抱えるようにして笑った。

「今の顔、隊員には見せられないですね。口、開きっぱなしでしたよ。舌まで出てた」

「舐めた口、きいてんじゃ、ねえ……」

「嘘じゃないですって。俺、ちゃんと見てたんで。動画のより、ずっといい顔でした」

俺は肩で息をしたまま、膝に手をついた。

防火衣のズボンが膝に溜まり、汗の染みた尻が蛍光灯の下に突き出ている。

航希がその後ろへ回る気配がした。

触られる、と思って、俺は尻を固くした。

航希はただ、俺の尻を眺めて、ふっと鼻で笑っただけだった。

「扉の跡、ついてる。四角く赤くなってますよ」

「……気が済んだか」

「半分くらいです。次は、もうちょっと近くで見たいんで」

航希はロッカーの棚からウエスを一枚つまんで、俺の胸に放った。

「拭いてください。床も、ズボンも。そのベリベリ、ザーメン詰まると留まらなくなりますよ。明日も着るんでしょ」

航希は最後まで、俺の体に指一本触れなかった。

俺は腰を折って、自分のザーメンを床から拭った。

前合わせの鉤に絡んだ白い筋は、ウエスでこすっても取れなかった。

「じゃ、俺、赤ペン届けてくるんで。おつかれさまでーす」

航希は扉を開けて、廊下へ出ていった。

扉が閉まる。

ウエスを握った右手が、まだ自分のザーメンの匂いをさせていた。

明日の朝、この手で、俺は小隊に号令をかける。

第2話　乾燥機の音

二日後の当直、昼の訓練が終わったあとの車庫で、航希が俺の防火衣のズボンを両手で広げてみせた。

「士長、これ、ベリベリのとこ固まってますよ。洗っときましょうか」

前合わせの面ファスナーに、白く乾いた筋がこびりついていた。

まわりで隊員がホースを巻いている。

「……自分でやる」

「拭いても取れなかったんでしょ、これ。鉤に絡むと、手じゃ無理ですよ」

俺が手を伸ばすより先に、航希はズボンを丸めて脇に抱えた。

「遠慮しないでください。俺、今日の洗濯当番なんで。乾燥機、夜に回しときます」

航希はズボンを抱えて、洗濯室へ歩いていった。

巻きかけのホースが、俺の手の中で緩んだ。

機関員がポンプの水圧の点検票を持って、俺のサインをもらいに来た。

俺は字を一つ書き損じて、二本線で消した。

消灯のあと、事務室の前を通ると、当直の同僚が机で日報を書き直していた。

「士長、まだ起きてたんですか」

「洗濯室だ。防火衣が回ってる」

「あー、楯岡が回してましたね。あいつ、当番の日だけは張り切るから」

同僚は欠伸をして、赤の入った日報に目を戻した。

事務室と洗濯室は、壁一枚で隣り合っている。

洗濯室の扉を開けると、洗剤と熱い布の匂いが顔に来た。

奥の乾燥機が、ごうん、ごうんと回っている。

丸い窓の中で、黒い防火衣のズボンの裾がガラスを叩いていた。
航希は乾燥機にもたれて、スマホをいじっていた。
俺が入ると、画面を伏せて作業台に置いた。
「来た。士長、律儀ですね」
「ズボンを取りに来ただけだ」
「まだ乾いてないですよ。もうちょっと」
航希は丸い窓をこんこんと指で叩いた。
それから、伏せたスマホの上に掌を乗せた。
「まだありますよ」
俺は後ろ手に扉を閉めて、そこに背中をつけた。

ノブが、掌の下で冷たい。

「壁の向こうに、あいつがいる」

「壁、薄いですよね。士長の声、太いから絶対抜けますよ」

航希は乾燥機の前を空けて、顎で示した。

「ここ、背中つけてください。あったかいですよ」

乾燥機の前面に背中をつけた。

熱い。

Tシャツ越しに、回転の振動が背骨を叩く。

航希が正面に立った。

下から、俺の胸を見上げている。

「腕、下ろしといてください。邪魔なんで」
航希の指が、裾にかかった。
前の夜、航希は一度も俺に触らなかった。
その指が、今、腹の皮をかすめた。
ひやりとした。
裾が胸の上までめくられる。
航希は丸めた裾を、俺の首の後ろへ回して襟ぐりに押しこんだ。
胸と腹が、蛍光灯の下に出たまま戻らない。
「手は後ろ。乾燥機に、ぺたって」
「……熱いだろうが」

「だからいいんですよ。手、離したらすぐ分かりますからね」
両手を後ろに回して、乾燥機の前面に掌をつけた。
手のひらが焼けるほど熱い。
胸が突き出る格好になった。
航希が、左の乳首を親指と人差し指でつまんだ。
「っ……」
ぎゅっと潰される。
痛い。
航希はつまんだまま、乳首を前へ引っぱった。
胸の肉ごと、ぐにりと伸びる。

「胸、厚いなあ。乳首、ちっちゃいのに。埋まってる」
「離せ、てめえ……」
「胸、厚すぎて乳首が埋まってますよ。掘り出していいですか」
航希は乳首をつまんだまま、反対の掌を俺の胸の真ん中にべたりと当てた。
「心臓、すごい。どくどく言ってる。ホース持って塔の上まで走ったあとみたい」
「……てめえの指の骨、全部へし折るぞ」
「折れたら筒先も持てないなあ。困るなあ」
航希は声を殺して肩を揺らした。

俺の胸の上で、航希の掌が笑いに合わせて小さく跳ねる。
掌が離れると、汗で湿った跡が胸に残った。
「右も」
右の乳首を、今度は爪の先で弾かれた。
ぴん、と痛みが走って、腰が乾燥機から浮いた。
浮いた背中が、また熱い面に戻る。
「ぐ、ぅ……ッ」
「今の、壁の向こうまで聞こえたかも」
航希は肩を揺らして笑い、両方の乳首を同時にこねた。
指の腹で、ゆっくり円を描く。

潰される痛みのあとに、むず痒いものが胸の奥へ降りていく。
短パンの前が、持ち上がってきた。
航希の目が、そこへ下りた。
「あ。乳首、いじられてこれだ」
「……寒いだけだ」
「乾燥機の前で？　じゃあ、これは何ですか」
航希の膝が、短パンの膨らみを下から軽く押し上げた。
布越しに、ちんぽがぐりっと潰される。
俺は奥歯を噛んで、鼻から息を逃がした。
「フーッ、フーッ……」

航希は作業台の籠から、白い洗濯ネットを一枚つまみ上げた。
筒の形をした、目の細かいネットだ。
「士長のちんぽも、汚れてるんで。入れときましょうか」
「……は？」
「短パン、下ろしてください。下着ごと」
航希は、ネットのファスナーを指で開け閉めしてみせた。
じじ、じじ、と小さい音がする。
俺は乾燥機から片手を離して、短パンと下着を膝まで下ろした。
勃ちかけたちんぽが、重く跳ねて出た。
「手、戻して」

熱い面に掌を戻した。
航希がネットの口を広げて、俺のちんぽの先にかぶせた。
竿をくぐらせ、金玉を下からすくい上げて、まとめて中へ入れる。
ファスナーが、根元の毛のすぐ上で閉まった。
じじじ、と音がした。
白いネットの中に、ちんぽと金玉が丸ごと詰まっている。
網目から、金玉の皮がぷくりと膨らんで出ていた。
「うわ。洗い物だ」
航希は声を殺して、喉の奥で笑った。

「網の目から金玉はみ出してますよ。ネットのほうが小さかったか」
「ふざけ……ッ」
航希はネットの先の余った網をつまんで、下へくいっと引いた。
中のちんぽと金玉が、ひとまとめに引っぱられて垂れ下がる。
根元の皮が伸びて、腰が前に引きずられた。
「お、重い。袋ごと持ってるみたい」
航希は網をつまんだまま、左右にぶらぶらと揺らした。
ネットの中で金玉が振り子みたいに揺れて、腿の内側にぺちぺちと当たる。
「や、め……ッ、揺らすな、ボケ……」

「重いんですよ、これ。手首、持ってかれそう。ぺちぺち鳴ってるの、俺のせいじゃないですからね」

航希は揺らすのを止めて、網を持ち上げた。

ネットごと、半分勃ったちんぽが腹のほうへ吊り上げられる。

航希はそれを、そのまま俺の腹にぺたりと押しつけた。

航希が、ネットの上からちんぽを握った。

初めてだった。

自分以外の手が、そこを握った。

網目が竿に食い込む。

航希の掌が動くと、ネットごと皮がずれて、細かい目が裏筋をざりざりと擦る。

「ン〝ッ……ぐ、ぅ……」

「声」

航希はもう片手で、ネットの下の金玉を揉んだ。

網の中で、二つの玉が転がされて、ぶつかり合う。

鈍い痛みが下腹へ上ってくる。

なのにちんぽは、ネットの中でみるみる太くなった。

太くなった竿に、網目がさらに食い込む。

亀頭がネットの先に押しつけられて、目のあいだから赤く膨らんだ。

「今、何されてるか言ってください」

「……黙ってろ」

「言ったら、手、ゆっくりにしてあげます。言わないなら」

航希は握った手を、一気に速くした。

ざりざりざり、と網が竿を削る。

「ひ、ぐっ……！」

「壁、薄いですよ」

ネットの目が、竿の皮を引きつれさせる。

「ぐ、ぎ……ッ、てめえ、それ、ネット、破れる……ッ」

「破れたら、新しいの買ってきますよ。士長の金玉が入るやつ。もっとでかいの」

俺は乾燥機の熱い面に、後頭部を押しつけた。

「……乳首、つままれて、前を、扱かれてる」

「前？　前って、どこですか」

航希の手が、亀頭のところでぎゅっと止まった。

網目越しに、指が鈴口を押す。

「……ちんぽ、だ」

「誰の」

「俺の、ちんぽ、を……ネットに入れられて、お前に、扱かれてる」

号令をかけるときの太い声のまま、俺は自分のちんぽのことを言っていた。

「もうひとつ。ネットの先、どうなってます？」

言わせたいのは分かっている。

目を下ろした。

ネットの先が、透けていた。

亀頭から溢れた汁が網目に染みて、白い糸を透明に変えている。

「……汁で、濡れてる」

「何汁ですか」

航希の親指が、透けたネットの先をぬるりと撫でた。
「我慢汁、だ……ッ、クソ、手ぇ、どけろ」
「手どけたら、汁がどこ行くか見えないじゃないですか」
航希は、手をゆっくりにした。
ゆっくりのほうが、網目が一本ずつ裏筋を越えていくのが分かる。
カリの段差に網がひっかかって、ずるりと越える。
越えるたびに、膝が笑った。
「言えたじゃないですか、ちんぽって。士長の口から聞くと、なんか笑える」

航希は、また喉で笑った。
俺は顔を横に向けた。
その頬に、航希の息がかかった。
「で、乳首は？」
「……言っただろ」
「どっちの乳首が、どうなってるか」
航希の空いた指が、右の乳首を下から弾いた。
弾かれた乳首は、さっきより尖って、赤く立っていた。
「右が……硬く、なってる。立ってる」
「左は？」

「ひ、ッ、左も……つねられて、じんじんする」

航希は弾いた指で、今度は左をつまみ上げて、ふっと息を吹きかけた。

「へえ。士長、乳首弱いんですね。知らなかった」

「ふざけ、んな……」

航希はネットの中の、上を向いたちんぽに目を落とした。

「これ、さっきから何て呼んでましたっけ」

航希は笑いながら、ネットの上から亀頭を親指でぐりぐりと押し潰した。

「ア゛ッ……！」

声が出た。

すぐに奥歯で噛み殺した。

乾燥機の回転が、ごうん、とその声にかぶさった。

壁の向こうで、椅子のきしむ音がした。

俺の背中が、熱い面の上で固まった。

航希は手を止めずに、壁のほうを見た。

ペンの音が、またかすかに戻ってきた。

「セーフ」

航希が小さく言って、また笑った。

「今の、聞かれてたらどうします？　あいつ、明日、士長の顔まともに見られないですよ」

「……てめえが、潰しに、かかったんだろうが」

「今のは乾燥機が助けてくれましたね。次は止まってるときに出してください」

航希は、乳首をつまむ指をそのまま下へ滑らせた。

汗で濡れた腹をなぞって、へそのくぼみに爪の先を入れる。

くり、とほじられて、ネットの中のちんぽが跳ねた。

「へそまで反応する。全部つながってるんですね、士長の体」

俺は荒い息を鼻から吐きながら、口を開いた。

「おい。条件を言う。灯を消せ。暗けりゃ、まだ我慢できる。それが駄目なら、このネットだけは外せ。外したら、声は絶対に出さねえ。乾燥機が止まるまでには済ませろ。止まったら、あいつに全部聞こえる。だから、それまでにしろ。それでいい、それなら黙ってやる」

「そういうのは、ネットから出てから言ってください」

航希はネットの上から、ちんぽを軽くぺちんと叩いた。

「ひ、ッ」

「灯は、点けとかないと顔が見えないじゃないですか。ネットは、まだ入れたばっかりです。乾燥機は、そろそろ止まりますね」

航希は丸い窓のほうへ顎をしゃくった。

ごうん、と回転がひとつ鈍った。

ピーッ、と短い電子音が鳴った。

ドラムがゆっくり回るのをやめた。

音が消えた。

洗濯室が、急に静かになった。

壁の向こうのペンの音が、はっきり聞こえる。

さら、さら、と紙の上を走っている。

航希の手が、ネットの上で一度大きく扱いた。

「ン〝……ッ」

喉が鳴った。

この静けさの中では、さっきの声の半分でも壁を越える。

俺は背中を乾燥機から剥がした。

振り向いて、丸い扉の取っ手を掴み、引き開けた。

熱い空気が顔に噴き出した。

中で、黒い防火衣のズボンがくたりと丸まっていた。

俺は腰を折り、その中に顔を突っこんだ。

熱い。

洗剤の匂いの奥に、まだ煤の匂いが残っている。

厚い生地に口を押しつけて、声の出口を塞いだ。

「へえ」

後ろで、航希が笑った。

「自分の防火服、そんなにいい匂いですか」

尻を、航希のほうへ突き出した格好になっていた。

膝の短パンに足を取られて、膝頭が乾燥機の縁にごつんと当たる。

航希が、後ろから俺の腰に体をつけた。

ネットの上から、また握られる。

「そのままでいてくださいね。顔、出したら聞こえちゃう」

「ん　ゞ、む……ッ」

「何言ってるか分かんないです。防火服、食べてるみたい」

航希は後ろから手を回して、ネットのファスナーをじじじ、と開けた。

ちんぽと金玉が、網から抜かれて垂れた。

網から抜かれた竿が、ひりひりした。

網目の跡がついているのが、見なくても分かった。

「ア、ぐ……ッ、網の、跡が、ずきずき、しやがる……ッ」

すぐに、航希の素手が竿を握った。

ぬるりとした。

網に溜まっていた我慢汁が、そのまま航希の掌に移っている。

「ア、ア、素手、で、ア、ぐ……ッ」

「ぐ、ぅ〝ッ……ンン〝ッ……」

声は全部、防火衣のズボンの中へ吸われた。

航希の手は、さっきよりずっと速い。

「ネットないと、ぬるぬるですね。網に溜めてた汁、全部俺の手に来てますよ」

にちゃにちゃにちゃ、と濡れた音が、静かな洗濯室に響く。

壁の向こうに届くのは、俺の声か、この音か。

「この音、あいつ何だと思いますかね。乾燥機、もう止まってるのに」

航希の左手が、脇の下から胸へ回って、乳首をひねった。

「ン〝ッ、ハ、乳首、まで、ア、やめ……ッ」

ちんぽと乳首を同時にやられて、腰が前後に揺れた。

揺れるたびに、尻が航希の腰にぶつかる。

「ケツでどんどんぶつかってくる。ノックしてるみたいですよ、士長」

航希の腰の前が、硬く張っているのが尻に当たった。

「当たってます？　士長のケツがぶつかってくるから、こっちまでこうなったんですよ」

こいつも勃っている。

部下の勃起を、俺は尻で知った。

「てめえ……何、おっ勃てて、やがる……ッ」

「腰、自分で振ってますよ。士長」

耳のすぐ後ろで、航希が笑った。

「ケツ、でかいなあ。柔道の人って、みんなこうなんですか。俺の腰、押し返されてる」

「ん〝ぐ……ッ、押しつけて、くんな、そんなもん……ッ」

「押しつけてるのは士長のほうですって。ほら、また来た」

俺の尻が、航希の硬いものを探すみたいに後ろへ揺れた。

止めようとして腿に力を入れると、今度は前へ突き出て、航希の手の輪にちんぽを押しこむ格好になる。

「ア、ぐ、どっち、行っても、てめえが、いやがる……ッ」

前にも後ろにも、逃げ場がなかった。

「前でも後ろでも、どっちでもいいですよ。士長の好きなほうで」

俺は防火衣の生地を奥歯で噛んだ。

生地の熱が、歯に染みる。

「ん〝、ぐ……ッ、ア、ア、手ぇ、ゆるめ、ろ、ア……ッ」

「フーッ、フッ、ぐ、ぉ〝……」

金玉が、根元へせり上がってきた。

「ア、ア、来る、金玉の、裏から、ア……ッ」

航希の左手が胸から降りて、金玉を根元ごとつかみ、下へ引き戻した。

「ア〝ッ、ぐ、ア……ッ」

「まだですよ。出していいって、俺、言ってないです」

「ン〝ン〝ッ……！」

引き戻された金玉が、また上がろうとする。

「ぐ、ア、金玉、千切れ、る……ッ、加減、しろ、ボケ……ッ」

航希は引き戻したまま、竿だけを扱き続けた。

出口を塞がれたものが、腹の奥でぐるぐる回る。

「金玉、ぱんぱん。握ってると、出たがってるの分かりますよ。いい子にしててくださいね」

膝が乾燥機の縁を何度も叩いた。

「ン〝、ぐ、離せ、ボケ、腹ん中、煮えて……ッ」

「顔、上げちゃだめですよ。ペンの音、まだしてますから」

生地の中で、俺は言葉にならない声を出し続けた。

「防火服の中で唸ってる。熊みたいですね、士長」

「何されてるか、言ってください」

航希の声が、背中の上から降ってきた。

俺は防火衣に顔を埋めたまま、口を開いた。

生地に吸われて、自分にもはっきり聞こえない声だった。

「……ちんぽ、扱かれて……金玉、握られて、出せねえ……乳首も、いじられて……ケツに、お前の、硬えのが、当たってる」

「最後のは、聞いてないですけど」

「ア、うるせ……ッ、出させろ、ボケ、出させろって……ッ」

航希が声を殺して笑い、金玉を離した。

離された瞬間、腹の奥のものが一気に下りてきた。

「どうぞ。防火服、しっかり噛んでてくださいね」

「お〝ッ……ぐ、お〝お……ッ！」

ちんぽがびくんと跳ねて、航希の掌の中に噴いた。

どぴゅ、どぴゅ、と何度も噴く。

「お〝、ア、ア、止まんね、ア……ッ」

掌から溢れたザーメンが、乾燥機の丸い扉の縁にぼたぼた垂れた。

「うわ、すご。扉までびちゃびちゃ。士長、乾燥機に種付けしてる」

航希は扱く手を止めなかった。

出ている最中も、出しきったあとも、絞るように扱き続けた。

「最後まで出しましょうね。残すと、また夜中に一人でしなきゃいけなくなりますよ」

「ひ、ぎ……ッ、もう、出、てる……ッ」

「手、べっちゃべちゃですよ。見ます？」

ぬるぬるの親指が、鈴口の上でくるりと回った。

「ここ、くるくるされるの、出したあとが一番効くんですよね」

「やめ、ろ……ッ、出した、ばっかで、そこ、こすんな、ひ、ぎ、腹の、奥まで、びりびり、来る、っつってんだろ……ッ、くそ、てめえ、明日、乾燥塔の、ホース、吊り替え、全部、一人で、やらせ……ッ、ひ、ぃ〝……ッ」

「吊り替え、好きですよ。高いとこ、得意なんで」

敏感になった亀頭を、ぬるぬるの掌でこね回される。

「ひ、ぐ、ア〝、先っぽ、溶け、る……ッ」

腰が逃げようとして、乾燥機の中へ頭ごと突っこみかけた。
「逃げると、防火服ごと回しちゃいますよ。スイッチ、すぐそこなんで」
航希がようやく手を離した。
俺は防火衣に顔を埋めたまま、肩で息をした。
「ハッ、ア……防火服、唾で、べちゃべちゃ、だ……」
膝が笑って、乾燥機の縁にしがみつく。
「ハッ、ハッ……ア、クソ……膝が、言うこと、きかねえ……」
ちんぽは半分萎えて垂れ、先からまだ白い糸を床へ引いていた。
「先から糸、まだ引いてる。士長のちんぽ、往生際悪いですね」

「顔、上げていいですよ。もう音、出ないでしょ」
俺は熱い生地から顔を抜いた。
汗で額に髪が張りつき、口のまわりが唾で濡れていた。
航希は俺の目の前に、自分の右手を広げてみせた。
指のあいだに、俺のザーメンが白く膜を張っていた。
「これ、全部士長のです。この前の当直でも出してたのに、溜まるの早いですね」
「見せんな……」
「見てくださいよ。士長の金玉から出たやつ」
航希は、その手を俺の胸に当てた。

さっき掌を当てて笑った胸の真ん中に、べったりと塗りつける。
ぬるい。
乳首の上を、ザーメンで濡れた指がぬるりと滑った。
「ひ、ぁ〝……ッ」
出したばかりの体に、乳首だけがまだ尖っている。
航希はそれを指で弾いて、喉で笑った。
「Tシャツ下ろしたら、中で染みますね。明日の朝まで、士長の匂い」
「てめえ……」
航希は肩を揺らした。

「拭きますよ。俺のタオルじゃないんで、雑にですけど」
「……てめえの手、ガサガサだな」
航希は自分の掌を返して、ちらりと見た。
「洗剤とバイクのハンドルです。士長のちんぽ、さっきからこの手で擦られてたんですよ」
航希は、乾いた掌を俺の目の前でひらひらさせて笑った。
指の付け根に、硬いたこが並んでいた。
壁の向こうで、ペンの音が続いている。
航希は作業台の籠から乾いたタオルを取って、自分の手を拭いた。

同じタオルで、俺の胸をざっと一往復だけ拭った。
乳首の上に、拭き残しのぬめりが残った。
それから、ザーメンの垂れた扉の縁を、同じタオルで拭った。
「ズボン、乾いてますよ。持って帰ってください」
俺は乾燥機の中を見下ろした。
防火衣のズボンの、ちょうど口を押しつけていたところが、唾で黒く濡れていた。
前合わせの面ファスナーは、白い筋が取れて、乾いていた。
航希は洗濯ネットを丸めて、洗濯機の中へ放りこんだ。
「おやすみなさい、士長」

航希はスマホを拾って、洗濯室を出ていった。

事務室の前で、航希が同僚に「おつかれさまでーす」と言う声が聞こえた。

翌朝、交代の申し送りのあと、当直の同僚が事務室で首を回しながら言った。

「士長。洗濯室、夜中に変な音してませんでした？　乾燥機、壊れてんすかね。ごんごん、うーうー言ってて」

俺の手の中で、申し送りの用紙が小さく鳴った。

同僚は欠伸をかみ殺している。

航希は、俺の横で、明るい顔で書類を揃えていた。

「……ゴムが」

声が出た。

昨夜、生地の中で出したのと同じ喉だった。

「窓のゴムが、ドラムに当たってた。点検票に書いとけ」

「了解っす。業者、呼びます？」

「いらねえ。俺が見とく」

同僚は点検票の端に何か書きこんで、帰り支度を始めた。

航希が、書類を揃える手を止めずに、俺にだけ聞こえる声で言った。

「説明、上手ですね。昨日もそうでした」

俺は申し送りの用紙を机に置いて、事務室を出た。

廊下で、唾を一つ飲みこんだ。

舌の付け根に、昨夜防火服の生地越しに言った「ちんぽ」の形が、まだ残っていた。

ほかの作品はサークルページから

---

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名　消防士長の俺、仮眠室で扱いてるのを部下に撮られ、当直のたびに防火衣を着たままケツ穴を突かれて中に出される

サークル　タビューへ

発行日　2026・10・20

レーティング　R18